

② B子の場合(中位生徒)

B子は、事前アンケートに数学は「きらい」と答え、その理由を「数学は得意なほうだけれど、授業がつまらなくて、すぐ反抗したくなってしまう」「手を挙げないことが多いが、授業で全く指名されないの、やる気がでない」と書いている。

そのB子が、事後の感想文で、「前よりちょっぴり数学が好きになりました。今までは、授業がつまらなかったけれど、学習法がわかったとたん、授業内容がおもしろくなってきました。そのため、やる気がでてきました」と書き、数学への興味・関心、そして、なによりも意欲を見せてきた。

本研究のねらい達成のためにとられた指導法は、一人一人の生徒が、学習のめあてを知り、自己のつまずきや到達度を確認し、個に応じた学習コースを選択し学習させる方法である。

検証授業において実践されたこの指導法は、B子を学習に引き込み、主体的に学習する動機づけをつくったことになる。つまり、興味・関心を高め、更には、強い学習活動意欲を促し、自ら学習しようとする積極的・自発的な心理状態をつくり出すきっかけになったわけである。

「学習のめあて表」により、課題を把握したB子は、課題の解決にむかって能動的に学習に参加した。その参加のようすは次のとおりである。

月日	形成的評価			学習コース	小テスト		
	問1	問2	問3		問1	問2	問3
11・4	○	○	×	B→C	○	○	○
11・6	○	○	○	C	○	○	○
11・8	○	○	○	C	○	×	○

11月4日実施の授業において、B子は、形成的評価問題を2問正解して、Bコースを選択した。Bコースの問題を解き終えた後、Cコースに進み時間となり、小テストを受け全問正解であった。

11月8日の授業では、Cコースを選択したが、11問中9問正解で、事後の「自己評価票」には、「分配法則の計算で、片方にかけるのを忘れてまちがえた」と記入している。自己のつまずきを発見し、正しく評価している。教師も「自己評価票」に「自

分でよく反省ができているから、今度は大丈夫だよ」と激励のことばを書き入れて、生徒の能動的な学習態度の醸成に細かい心遣いを見せている。

教師のこの心遣いが、教師と生徒のより好ましい人間関係を形成し、これが基盤となって、個の能力が開発される。B子の変容は、その好例と見られる。

数学の授業において、問題を解いて、正答をだせるということほど楽しいことはないと思われる。B子は感想文に、「最近、計算ができるようになった。つまづくこともあるが～やっと解けた時はとてもすっきりします」と、解く楽しみや満足感・充実感を書きしるしている。

そして、「計算ができるようになった」理由として、「～学習法がおもしろくて、前とかわっていてやりやすいので～」と、分枝型学習をあげている。

このことは、B子の学習のペースを尊重した分枝型学習が、B子に適應していたと解する証左とみてよいだろう。

新しい学習法を身につけたB子は、「～これからは、数学が得意な科目となるようにがんばりたいと思います」と感想文で決意を述べている。

この感想には、真実性があると思われるし、書かれている決意もその場限りのものではなく、以後の授業に反映されるであろうと期待できる。

数時間の検証授業において、このような変容をみせたB子の事例は、特異なケースかもしれないが、このような生徒がでたことも事実である。

B子の観察を総括すると、「学習のめあて表」と「自己評価票」が有効に機能した時、具体性をもった課題を設定し、しかも、課題の解決にむかって、能動的な学習活動を展開している。ここに、「学習のめあて表」や「自己評価票」の有効性を知ることができよう。

また、学習者の課題に即した「学習プリント」についても、難易度を考慮した作問が適切で、更に学習者のペースを尊重したコースが設定されており、個に応じた効果的な学習への手だてであった。

本研究で示された、学習の手だては、B子のような中位生徒に、より有効に作用したと考える。